

## 「21 世紀型のカリキュラム改革

### ーその特質と構造ー」

佐藤 学(教職開発コース)

#### はじめに

本シンポジウムでは 10 年後の改訂を見通して議論したいとのことで、私もそれを試みたいのですが、2020 年は実は非常に重要な年です。OECD が例の PISA 調査をするときに想定したのが 2020 年です。この 2020 年という年を、OECD は日本も含む加盟国 30 カ国の労働市場を算定予測して、製造業が労働市場に占める比率が、多い国で 10%、少ない国では 4%になると言っています。いわゆる知識基盤社会という形です。30 カ国すべてが、70 年代には労働市場の 70%が製造業部門の労働者でした。この社会の大きな構造的な展開に向けて、学校はどのような教育をすべきかという問題が一つです。

もう一つは、2010 年という年は、ヨーロッパ諸国で 1990 年代からかなり議論になっています。18 歳段階をどのように考えるかという問題と、大学など高等教育を含めた修了年限をどこに設定するかということで、大体 30 歳を基準に考えようということがほとんど合意に達した時期なのです。例えばスイスを見ると、今は全部教育システムを 30 歳を基準に考えています。ですから、この 18 歳、30 歳は、その後非常に重要な基準になってきていると思います。

つまり、生涯学習社会へ参入するに当たって、学校教育はどのようなレベルで教育すべきか、それから、構造的に変化する社会とどのような関係をつくり出していくのか。この二つの危惧があります。事実、この過去 5 年間の自分自身の体験を振り返ってみると、各国の教育学会やカリキュラム学会で、シンポジウムならびに講演をする機会があったのです。アメリカ、カナダ、メキシコ、イタリア、ドイツ、中国、韓国、シンガポール、台湾、これらのところですべてで、2020 年段階を想定した

ときに、今の学校改革をどのようにするかということがかなり議論されています。21 世紀を迎えるときに、2010 年を一応のメルクマールにして、その社会を想定したときの学校の在り方、教育の在り方が議論されているのですが、先ほど市川先生が詳しくお話しになったように、日本であまりそういう議論をしてこなかったという思いがあります。そういうことも含めて全体の話をしたいと思います。

#### 21 世紀型カリキュラム

ここでいう「各国」は一応 OECD 諸国、いわゆる先進諸国と考えてください。もちろん、途上段階の国々、アフリカ諸国、イスラム圏などがまた違った論議で出てくるがありますが、基本的には OECD 加盟国を前提に考えたときに、一連のナショナルカリキュラムが共通して掲げている基本課題があります(図 1)。

### 21 世紀型カリキュラム

#### <基本課題>

- ① 知識基盤社会の教育
- ② グローバル教育・多文化共生の教育
- ③ 格差・リスク社会の教育
- ④ 市民性の教育

#### <基本原理>

- ① 「質 (quality)」と「平等 (equality)」の同時追求
- ② 「プログラム」から「プロジェクト」へ
- ③ 新しい授業と学びの様式
- ④ 教師の専門家共同体の構築

図1

まず知識基盤社会の教育で、これはどこも 90 年代の終わりごろから掲げています。2 番目はグローバル教育、多文化共生の教育です。3 番目は格差・リスク社会を前提にした中での教育の在り方です。4 番目が市民性の教育です。

来年度から完全実施される新学習指導要領は、戦後の指導要領の中でも非常に質の高いものに

なっていると思います。残念なことに、これは学力問題への対応ということで、1 番の問題がかなり議論されたと思うのです。文面を見ても、グローバル教育・多文化共生の教育も、格差・リスク社会の教育も、市民性の教育も出てこないのです。これは多かれ少なかれ 10 年後を想定すると、大議論になるかもしれません。ですから、21 世紀型カリキュラムを考える場合に、この四つの基本課題が日本社会にどのように今後、教育論議の中でされていくのかということは見据えておいた方がいいです。

それから基本原理の問題では、質と平等という問題が中心にあります。一言で言うと、qualityの問題です。それからカリキュラムの原理として、「プログラム」型から「プロジェクト」型へということが基本的に言えるでしょう。プログラム型というのは 19 世紀型で、目標を設定して、プロセスを効率化して、最後はテストをして、というパッケージで使われているものです。それがもはやプロジェクト型になり、テーマ中心型で、教科を越境していくような教科編成の構造が展開していくということです。3 番目としては「新しい授業と学びの様式」が想定されています。

4 番目が重要なのですが、教師の質の問題とカリキュラムの開発の問題がセットになっています。教育の質保証ということになると、教師の専門性の開発と、カリキュラムの開発と、学校の構造的な転換がセットにして扱えないと、カリキュラム改革は成功しないということが前提になっています。

### 授業と学びの様式

カリキュラムは「プログラム」型から「プロジェクト」型へ(図 2)。学習様式は「個人学習から協同学習へ」。これは言い換えれば、一般の一斉授業から協同学習へということです。それから教師の役割は「教える専門家」から「学びの専門家」へ、あるいは「授業の技術」から「学びのデザイン」、ファシリテーターへととなります。

### 授業と学びの様式

- カリキュラム＝「プログラム」型(階段型)から「プロジェクト」型(登山型)へ
- 個人学習から協同学習へ (一斉授業から協同学習へ)
- 「教える専門家」から「学びの専門家」へ＝技術的熟達者 (technical expert) から反省的実践家へ (reflective practitioner) へ
- 「授業の技術」から「学びのデザイン」へ

図 2

### リテラシー(教科教養・共通教養)の教育

もう一つのキーワードが、後ほど藤村さんのお話にある「リテラシー」(図3)です。カリキュラムの評価のところに必ずリテラシーが書かれています。日本でリテラシーの概念は「識字」や「読み書き能力」と訳されているのですが、これは 1960 年代にユネスコが一種の文盲社会に対する識字教育をするときのプログラムでリテラシーと言ったことから、読み書き・識字と理解されているのです。これは極めて日本的な特殊な概念だと思います。

### リテラシー(教科教養・共通教養)の教育

- 1) リテラシーの概念＝学校で教育すべき共通教養＝市民的教養の基礎(機能的リテラシー)
- 2) リテラシー概念の再定義(PISA)  
数学的リテラシー＝「数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠にもとづき判断を行い、数学に携わる能力」

図 3

国際的な概念でいうリテラシーとは、共通教養です。リテラシーという概念は、1884 年、マサチュ

一セッツ州で最初に使われました。つまり公立学校が制度化されるときに、どのレベルまでの教養を市民的教養として想定すべきかというのがそもそもの始まりでした。現在はこれは機能的リテラシーといいますが、リテラシーというとアメリカやヨーロッパの場合、高校の教養レベルです。それが社会生活に参入するのに必要なリテラシーです。ですから、リテラシーとは「学校教育が責任を負うべき心理的教養」あるいは「共通教養」であると考えるのがふさわしいかと思います。これが教科ごとのリテラシーの概念として、より拡張されているのが特徴かと思います。

例えば PISA では、「数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在および将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において、確実な数学的根拠に基づき判断を行い、数学に携わる能力」という長々とした規定になっています。これが、PISA が想定している数学の基礎項目です。ですから、知識が持っている社会的機能と文脈とその意味付けをセットとしてリテラシーという概念を使うことが重要です。

なぜこういうことをお話したかというと、実は現在進められているものは、創造性や探究教育、あるいは思考と探究が中心のカリキュラムになっていますが、次回もこれは非常に強調されるでしょう。思考と探究の教育は、一見すると 60～70 年代に日本を含む世界が取り組んだ、いわゆる discipline-based curriculum に非常によく似ているのです。ですから今後も起こると思うのですが、その大きな違いがあると思うのです。思考と探究と言いながら、知識観が決定的に違うのです。それから、学習観が違ってきます。

知識観がどう違うかというと、現在言われている知識は、一つは変容的、もう一つは機能的、もう一つは文脈的です。諸外国の一番新しい版の教科書を見てもらうとわかりますが、フィンランドの教科書などは非常に象徴的です。あるいはカナダ

のものはもっと象徴的です。数学の内容は、社会的な意味、実際の現代生活に全部つながって問題を解かせます。日本の教科書評価には壁があって、数学には数学しか、理科には理科しか出てきません。もちろん評価のドメインはしっかりしています。知識のドメイン、構造は高度化されると同時に、それらが持っている意味内容や意味のコンテキストが非常に拡充されているという知識の変遷のされ方がしています。

### 変わる授業と学びの様式(北米)

ここ 20～30 年間、21 世紀型のカリキュラムが言われるようになって、一つの大きな目に見える変化として、教室の風景と授業の様式が大きく変わりました。これ(図4)は北米で訪問した学校の写真です。500 校ぐらゐを調査してきましたので、一般的な傾向とそんなにずれていません。



図 4

上の3枚はカナダ、下の3枚はアメリカです。一つの特徴は、黒板を使った一斉授業が消えてしまっていることです。プロジェクトテーマ中心の協同学習です。上の写真は、左側はトロントの中学校、真ん中はモントリオールで、人種が非常に多く混在している地域の小学校、そして右側はトロントの高校だと思えます。小中高は基本的に同じ構造で、教壇があって一列ずつ机が並んでいると

いう教室はもう消えています。小中高すべてが基本的にはテーブルになっていて、プロジェクト中心という構造になっています。

カナダでは一斉授業はほとんど消えています、アメリカでは、実は現在も貧困地域に残っています。アメリカの場合は階層差や人種差が非常に激しいのです。しかし、中流以上ではもう消えています。下の写真は、中の下の地域です。左がボストン、真ん中がシカゴの教室風景です。左は非常に典型的なスタイルです。4人グループで、テーブルで学んでいます。真ん中は小学校低学年です。1～2年生は大体このように円座を組んで学びあっており、作業をするときには自分のテーブルですというスタイルです。

右側に出したのはボストンの図書室です。いずれも図書の問題が非常に重要になっています。図書室は学習リソースセンターであると同時に、教師のカリキュラム開発センターなのです。日本で図書室に本を借りに行くと、一番端っこに図書室があり、しかも茶色い本しか並んでいないという悲惨な状況です。もちろんコンピューターによる学習支援も重要なのですが、同時に図書・学習資料のリソースの問題が新しい学びの様式において非常に重要になっています。教師自身がカリキュラムの開発をしていくときのリソースのシステムと、そのコーディネートということです。これは今後かなりそうなるだろうと思われるのですが、図書館司書が子どもたちの読書指導をするだけではなくて、教師たちのカリキュラム開発に対するリソースを提供できる支援者になっていくという役割が見られます。

### 変わる授業と学びの様式(欧州)

これ(図5)はヨーロッパです。左上はドイツです。低学年なので、やはり円座を組んで学びあう形です。小学校低学年の場合に重要なのは教科と総合学習とのつながりで、これがどこでも問題になっています。

### 変わる授業と学びの様式(欧州)



図 5

上段真ん中もやはりドイツで、多文化共生教育が非常に進んでおり、親たちとも一緒に教師が学習会をしているところです。つまり、ドイツ語が話せない人たちの学習会があるのです。しかも面白いのですが、この地域はイスラム圏の子たち、親たちがいますが、トルコ系が多いのです。その親たちが教師とチームを組んで、子どもたちの学習の援助に入ってくるのです。親を含めた中での多文化共生教育が行われています。

右上はイタリアの小学校です。アートとデザインの教育はカリキュラムで重要な一つの柱になっていると理解しているかと思います。このアートとデザインの教育は、フィンランド、カナダ、オーストラリア、北欧では非常に重要な柱になって、ここ15年ぐらい続いています。実は、これ以外にもアートの教育を重視しているところは国際学力テストでも高い成績を収めるという皮肉な結果があります。アートやデザインの教育をおろそかにしているところほど、どんどん落ちていきます。この辺の構造はカリキュラム的にもっとわれわれも研究しなければいけないテーマです。

左下はスウェーデンで、下段真ん中はフランスです。フランスの授業はいつも見るに値すると思うので、3年に1回ぐらいは見ています。理由は、フランスの授業形態はヨーロッパで一番伝統的

古くさいのです。ここでは黒板を使っていますが、もはや黒板は消えていて、電子黒板なのです。プレゼンテーションとゼミナール形式と、少人数のグループ学習が基本形態です。右下はフィンランドです。

### 変わる授業と学びの様式(アジア)

この変化はアジアにおいてもかなり進んできています。上段は、左がインドネシア、真ん中が韓国、右は北京です(図 6)。下段は左が上海、真ん中がつい 1 カ月前に撮ってきたのですが、黒竜江省のハルビンです。ハルビンで非常に驚いたのが、中国というのは教育改革が日本よりある種遅れた面があるのですが、このところ急速に進んでいて、黒竜江省も黒板がなくなったそうです。全部電子黒板になって、ハルビン市に至っては個人用の机もなくしてしまったのです。だから机は 4 人でしょう。協同学習をどう組織するか、探究中心の学びをどう組織するか。いわゆる素質教育を議論されたレベルがもう終わって、次は学びの質、学習の経験の質という議論が展開しています。昨年は西安を調査したのですが、北京、上海だけではなくて、西安といい、黒竜江省といい、教師たちの研究が本当に 21 世紀型に急速に進行していると思いました。授業が非常に優れていて、びっくりしました。



図 6

右端はいい写真がなくて申し訳なかったのですが、シンガポールです。シンガポールも表向きは TIMSS で学力テストの結果ばかりが強調されていますが、実は芸術教育も非常に重視しています。これはある小学校の美術室の展示物です。作品が非常に良く、イタリアで見たレベルに達しています。日本の教育も学ばなければいけないと思いました。

それから私は 6 月に、授業研究あるいは創造性、プロジェクト重視のカリキュラム開発を中心とした学校改革、授業のニーズを抽出した学校改革を進めるという研究会で講演を頼まれたのですが、驚いたのは 7 割の校長が、レッスンスターディーを中心に小中の学びの教材づくりに挑戦して実践しているという状態です。ですからこの 5 年間、シンガポールはここ 4 年間ぐらいで抜いてきたのですが、ものすごく急速な展開で教育の質追求にシフトチェンジしたのです。習熟度別も廃止するそうです。そういう方法での転換がアジア全体で起こっています。

こういう非常に大きな転換において実はアジア諸国が特徴的なのは、トップダウンでやっているのです。中国、韓国、香港、シンガポールもそうですが、トップダウンです。でも、それがいい成功を収めるかどうかは疑問です。いくら協同学習のスタイルをつくっても、協同学習は形だけで一斉授業が行われる傾向がなきにしもあらずです。評価においてはまたテストから抜け出せないなど、いろいろな悩みが語られました。しかし、大きな転換が今起っていることは事実です。あえて今、一斉授業を見ようとすると、北朝鮮と日本だけになりつつあるということに非常に大きなドラスティックな意味があります。

その背景は非常に複雑だと思います。一つは知識基盤社会の移行で、ポスト産業社会の移行と言いながら、中国あたりは知識基盤社会へ進むと同時に、もう一方では途上国型の教育が残ってい

るのです。ですから、その両方が並存してしまい、議論の自動化や熟達化、習得重視が一方で残りながら、もう一方では新しいものが入ってくるわけです。これは非常に複雑な問題を起こしています。つまり、質における格差問題をつくり出したのです。従来はテストによる格差があったのが、教育の質、学びの質による、あるいは提供される教育の質による格差が地域格差、階級格差、階層格差という形で非常に進んでいるというのが一つです。

それから、これはヨーロッパもアメリカもアジアも共通しているのですが、言語教育が重視されています。多分この背景には、多文化状況がどんどん進んでいることと、グローバリゼーションの問題があります。多文化状況も非常に進んでいて、驚いたのはイタリアとフィンランドです。これらの国々は移民が少ないので有名ですが、過去5年間でどちらも5倍になっているのです。気になって、私は自分の関係している学校20校ぐらいを調べてみましたが、過去5年間でやはり日本でも移民が5倍になっているのです。これは加速度的に増えています。

そうすると10年後を見た場合、ヨーロッパでは非常に早く進みますが、北アメリカあるいは南アメリカでもすべてが国境を越えて人が流動しているので、アジアは国境が厚いのですが一番経済発展しているところですから、当然ドラスティックな転換が待ち受けていると想定しています。

### 変わる授業と学びの様式(日本)

日本の中でも小中高で、それに呼応するかのようになざまな授業や学びの様式に変化が起きているところ(図7)。



図7

### カリキュラムの主要領域

カリキュラムの主要領域(図8)を今後考える場合に、一つは、リテラシー教育(科学的教養・共通教養)を科学的教養教育と言語的教養教育の二つに分けてみてください。

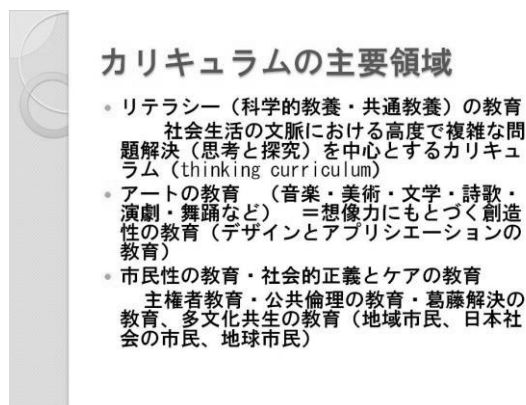


図8

それから、アートの教育です。音楽、美術、文学、詩歌、演劇、舞踊などの想像力に基づく創造性の教育です。デザインとアプリシエーションの教育と言っていいです。これがかなりどの国も重視しています。

そして、市民性の教育です。これは社会的正義とケアの教育と言っていいです。主権者教育、公共倫理の教育、葛藤解決、それから多文化共生

の教育で、グローバルなシチズンシップ、日本社会のシチズンシップ、地域社会のシチズンシップです。こういうシチズンシップの多元性を想定した教育カリキュラムが必要で、またこれほどの国も取り組んでいる課題と言っていると思います。

### 学校改革・教師政策のトライアングル

さらにカリキュラムを考える場合、教育内容(コンテンツ)をどう組織するかは重要ですが、同時に、人とリソースをどのように組織していくのか、時間・空間をどう組織していくのかという全体の問題を考えなければいけません。非常に単純に言うと、「人的資本(教師の知識と能力)」「社会資本(専門家共同体)」、文化財のいわばリソース、「授業と学びの構造と様式(カリキュラム)」で、それらをトライアングルで考えてみます(図 9)。ポリシー全体が問われるのです。

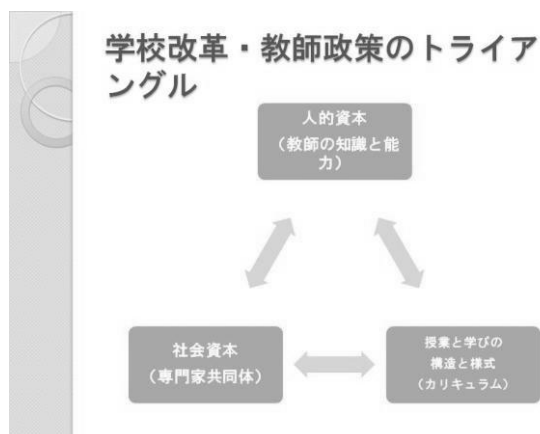


図 9

### 専門家共同体の構築

中でも重要なのは、カリキュラム開発と並行して、専門家共同体を構想することです。左上はスウェーデン、右上がドイツ、左下が韓国、右下は日本の高校ですが(図 10)、このように一つの授業の実例を検討しながらカリキュラム開発を進めていく。その中で教師の専門家共同体を構築しようという流れで、現在の学校改革・カリキュラム改革の中

核的な場面の一つになっているのです。



図10

### 21 世紀型カリキュラムは学校単位で展開する

21 世紀型カリキュラムは学校単位で展開することが重要です(図 11)。これまでカリキュラム改革、学習指導要領の改訂は中央中心に議論されてきましたが、どの国も分権改革になってきています。そうすると、カリキュラム改革は中央レベル、都道府県教育委員会レベル、学校レベル、もっと細かく言う教室レベルと、幾つか多面的なものを持っていますが、どの国を見ても分権改革の下で今コアになっているのは学校です。ですから、学校単位でカリキュラムの改革を、どのように中央レベルでの行政が支援してくれるか、それから市町村レベルの教育委員会が支援、あるいは大学がサポートしてくれるのかという構造的な問題が出てきます。今回の学習指導要領の改訂で分権改革は並行して議論されなければいけなかったと思うのですが、残念ながら日本ではその議論は進んでいません。これが 10 年後は絶対に問題になると思います。

結び＝21世紀型カリキュラムは学校  
(school-based) 政策を中核として展開する

- 1) 学校改革＝学びの質 (quality) の追求、授業と学びの革新、専門家共同体の形成
- 2) 学校改革を促進するカリキュラム開発＝curriculum design、curriculum shaping の概念
- 3) 教科書の革新、学習資料・環境の開発
- 4) カリキュラム政策 (policy) の転換＝中央レベル・(市町村) 教育委員会レベル、学校レベル、教室レベルの多層的な政策の革新が必要。
- 5) カリキュラム政策＜ヴィジョンと哲学＞＜資源 (文化的、人的、財政的)＞＜デザイン＝実践＞＜評価＝省察＞の研究の進展が求められる。

図 11

「学校改革を促進するカリキュラム」。カリキュラムはデザイン、あるいはシェイピングする(形づくる)ものです。カリキュラムコンストラクションという建築メタファーではなくて、デザインメタファー、さらには手づくりメタファー、手で作るというイメージです。子どもと教師がそこにどうつくり上げたか、あるいは子どもとともにどうつくり上げたかというレベルの議論が重要になってきました。そうすると、やはり学校単位で考えながら、行政全体の質という事になってくると思います。

教科書は本当に日本の場合は大きな問題です。はっきり申し上げて、日本の教科書はまずもって薄い。先進のほかの国と比べて6分の1ぐらいの薄さです。だから詰め込みになってしまうのです。フィンランドの場合は、中学校の数学だけで日本の5倍ぐらいの教科書を8冊使います。生物でもその大きさの教科書を7冊使うのです。ですから、学習のリソースをどう豊かにするのかということは、カリキュラムの構造上、大きな問題です。

それから環境です。電子黒板等を含めて、コンピューターの環境による学習支援の環境が教室レベルでつくられる必要があります。

それからポリシーの問題で、学校単位としながら、各政策決定レベルでの役割と機能、責任をはっきりする必要があります。そうすると、カリキュラム政策は幾つか問題力を持っています。まず、ヴィジ

ョンと哲学をめぐる問題力です。それから資源(リソース)で、ここでのいう資源とは文化的リソース、人的リソース、財政的リソースです。これらのリソースをどのようにポリシーに組み込むか。それから、デザインです。どのような授業や学びの様式を想定しながら、あるいは学校の組織の在り方を構想しながら、カリキュラムの内容を決めるか。さらには、さまざまな取り組みをどのように評価し、システムとして機能させていくのか。こういう内容構成について議論にかけてもらって、全体像は多分10年後には、というより、今から生まれてくるのではないかというのが私の意見です。

## セッションⅡ

### カリキュラムの新たな構成要素

#### 「言語力を育てるカリキュラムと授業のために」

秋田 喜代美(教育心理学コース)

### ことばの教育とカリキュラム

国際学力テストでも、日常の生活の中でも、学ぶ力の根幹として言葉の力が低下しているのではないと言われるようになってきています(図1)。特にメディアによる情報化やグローバル化の中で、携帯電話に象徴されるように、つながりたい、しかし非常に薄い言葉、軽い言葉が氾濫している。むしろじつくと沈黙して自分の言葉を考える時間や、そこに対する恐れも、中等教育の実際の教室の場で会う生徒たちにはあるのではないかと思うことがあります。また、頻繁にコミュニケーションを取りたいというのは、他者と違うことを意識するのではなく、内輪、仲間うちだということです。言葉を交わすことによって異質性や自分の特異性・独自性を自覚する、あるいは他者を承認する機能は弱まってきており、内輪のおしゃべり的な会話がさまざまなところでネットワークとしてできているのが現在ではないかと思います。